

身体的魅力と内面的魅力が好意度に 及ぼす影響の性差

佐藤 舞

問 題

身体的魅力の高低が、その人に対する評価や社会的行動にさまざまな影響を及ぼすことは、これまで繰り返し指摘されてきた。たとえば、身体的魅力が高いと、緊急時に支援を得やすい（West & Brown, 1975）。教師は、身体的魅力が高い学生の方が知的で高い能力をもち、より適応していると判断する傾向があり（Lerner & Lerner, 1977; Ritts, Patterson, & Tubbs, 1992）、選抜時の面接の評価でも、身体的魅力が高い志願者はよい評価を得やすい（Wapnick, Darrow, Kovacs, & Dalrymple, 1997）。仕事上も有利に作用し、身体的魅力が高い女性は職を得やすく、賃金も上がりやすい（Loh, 1993; Marlowe, Schneider, & Nelson, 1996）。また、さまざまな職業集団で、身体的魅力が高い人の方が収入が高い（Hamermesh & Biddle, 1994）。採用の専門家でさえも、身体的魅力の高い候補者の方が仕事にあった性格特性をもち、業務成績も優れ、職を得る機会が高いとみなす傾向がある（Gilmore, Beehr, & Love, 1986）。司法判断にも影響し、陪審員は身体的魅力の高い容疑者に対して概して寛大であり（Downs & Lyons, 1991）、レイプ事件では、身体的魅力の低い女性が被害者の場合、被害者側にも責任があるとみなされやすく、逆に被告の身体的魅力が高いと寛容な判決を受けやすい（Jacobson, 1981; Thornton & Ryckman, 1983）。セクシャルハラスメントの判決でも同様の傾向が存在する（Castellow, Wuensch, & Moore, 1990）。さらに、政治家の身体的魅力は、その評価を左右する（Lewis & Bierly, 1990）。

こうした傾向をもたらす背景として、Dion, Berscheid, & Walster (1972) は、「美しいことは良い」というステレオタイプが存在すると指摘した。さらに、Eagly, Ashmore, Makhijan, & Longoe (1991) はメタ分析によって、身体的魅力の高さは、人気の高さ、社会的スキル、社会的自信などの社会的特性と強く結びつき、知的能力や社会的適応と中程度結びつくが、正直さや他者への配慮のような人格的な統合とは結びつかないとし、これを身体的魅力ステレオタイプと呼んだ。身体的魅力ステレオタイプとは、身体的魅力が高い人は他の点でも望ましい属性をもつとみなされる傾向であり、身体的魅力の高い人を社会的に有利にさせる信念や期待である。Feingold (1992) も、身体的魅力

が高い人は社会的である、愛想がよい、支配的である、性的に活発である、精神的に健康である、社会的スキルが高いなどとみなされるとともに、より成功し、幸せな人生を送ると予測されることを明らかにした。ただし、知能や適応、自尊感情とは関係がないと述べた。その後の Langlois, Kalakanis, Rubenstein, Larsen, Hallam, & Smoot (2000) も、同じような身体的魅力ステレオタイプの存在を報告している。それゆえ、関連するとされる特性の詳細には必ずしも一致しない点があるものの、身体的魅力の高さは社会生活のさまざまな領域で有利に作用するといえよう。

身体的魅力は直接観察できる特徴であるため、何の情報ももたない初対面どうしであれば、身体的魅力ステレオタイプの知見は、かなりな程度そのまま適合するであろう。しかしながら、身体的魅力は、つねに独立に評価されるわけではないと考えられる。他者の印象を形成する際、個々の属性の意味は全体に依存し、他の属性の様態によって変化すること (Asch, 1946) を考慮すると、身体的魅力に対する評価やそれが及ぼす影響も、他の属性によって変化することが考えられる。実際、日常場面においては、初対面であっても身体的魅力以外の情報をもっていることも多い。そのような場合、身体的魅力はそれらの情報に照らして評価される可能性がある。これまでも、身体的魅力に対する評価は状況によって変動することが指摘されてきた。たとえば、パートナーへの愛情が高まると、その身体的魅力に対する評価が高くなるとともに (Gross & Crofton, 1977)、他の異性の身体的魅力に対する評価も低くなる (Johnson & Rusbult, 1989)。しかしながら、身体的魅力に関する情報とその他の情報が併存するとき、それによって相手に対する評価、とりわけ好意度がどのように変化するのは、さらなる検討が求められるところである。

身体的魅力の作用には性差が関与する。確かに、身体的魅力は男女を問わず、異性に対する評価を左右する重要な要因である (Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman, 1966)。しかしながら、Buss (1989) は進化論心理学の視点から、男性と女性では、配偶者を選ぶという目標を達成するために用いる戦略が違うために、異性に対する評価基準が異なると述べた。すなわち、女性は子供を作る数に限りがあり、また生まれた子供を守らねばならないために、男性に対して選別的になり、経済力があるか将来経済力をもちそうで、自分に専心してくれる相手を求める。一方、男性はそうした制限がない反面、より多くの子孫を残そうとするため、出産に期待がもてる若くて身体的魅力の高い女性を求めるとした。そして、多くの文化で、男性は女性の身体的魅力、女性は男性の財力や勤勉さを重視することを明らかにした。

個人の特性は、顔や体型など直接観察することができる、外見と総称される身体的魅力、性格など直接観察することができない内面的魅力、社会階層や地位、資産などの社会的属性に大別することができる。このうち、身体的魅力と内面的魅力は個人的属性である。女性において、これら2つの魅力の関係を考える上で注目されるものが、身体的魅力が及ぼす否定的な影響である。身体的魅力の高さは、一般に社会的に望ましい特徴と結びつくものの、自惚とも結びつき (Eagly *et al.*, 1991)、自己中心的で、物欲が強く、浮気しやすいため結婚に失敗するとみなされやすい (Dermer & Thiel, 1975)。そこで、Cash & Janda (1984) は、こうした身体的魅力のもつ否定的側面を「美

しいものは自己中心」ステレオタイプと名づけた。実際、Sigall & Ostrove (1975) は、身体的魅力の高さを利用した詐欺のような犯罪に対しては、身体的魅力が高い方が厳しい判決となることをみだしている。Fletcher, Tither, O'Loughlin, Friesen, & Overall (2004) も、女性は身体的魅力が高いが冷たい男性よりも身体的魅力は低い優しい男性を好むと述べている。これらの知見を踏まえ、女性は、身体的魅力の高い男性が好ましくない内面的魅力をもっている場合には、身体的魅力が低い男性よりも却って強い反発を示すことが考えられる。その一方で、身体的魅力の高い男性が内面的魅力も高い場合には、身体的魅力は低い内面的魅力は高い男性よりも肯定的に評価されると考えられる。そこで、女性の場合、内面的魅力の高低による好意度の差は、身体的魅力が低いよりも高い方が極端になり、内面的魅力が高い男性はより好意的に、また内面的魅力が低い男性はより拒否的に評価されると予想される。

これに対し、男性は女性よりも身体的魅力を重視することが、繰り返し指摘されてきた (Feingold, 1991; Sprecher, Sullivan, & Hatfield, 1994, など)。それゆえ、身体的魅力の重要な要素である顔 (Pansu & Dubois, 2002) は必ずしも多産と結びつくわけではないものの、男性の場合、身体的魅力が高く内面的魅力が低い女性に対する反発はみられないと考えられる。さらに、男女とも異性のもつ明るさなどの性格特性は同じように重視する (Buss, 1989) とすると、男性の場合、女性の身体的魅力と内面的魅力は好意度に対して加算的に作用すると予想される。

これまでの議論をまとめると、男性と女性では、身体的魅力と内面的魅力の関係が好意度に及ぼす影響が異なると考えられる。具体的には、男女それぞれについて、好意度に関する以下の仮説が導かれる。本研究の目的は、これらの仮説を検証することにある。

仮説1：女性では、異性の内面的魅力が高い場合は、身体的魅力が低いよりも高い方が好意度が高くなるのに対し、内面的魅力が低い場合は、身体的魅力が低いよりも高い方が好意度が低くなる。

仮説2：男性では、異性の身体的魅力、内面的魅力がそれぞれ高いほど好意度が高くなる。

方 法

実験協力者と条件配置

大学生男性 60 名、女性 60 名の計 120 名を実験協力者とした。男性の平均年齢は 21.2 歳 ($SD = 1.25$)、女性の平均年齢は 21.5 歳 ($SD = 1.14$) であった。男女各 15 名を、ランダムに身体的魅力高・低×内面的魅力高・低の 4 群に割り当てた。実験は質問紙に回答する個別回答形式で行われた。

質問紙の構成

フェイスシートでは年齢と性別の記入のみを求めた。最初に、異性のもつ魅力に関する自身の考え方を確認させる目的で、異性の身体的魅力と内面的魅力の特徴について自由記述を求めた。具体的には、身体的魅力については「あなたにとって外見的に魅力がある異性とはどのような特徴を

持った人ですか。できるだけ具体的に述べてください。」、内面的魅力については「あなたにとって内面的に魅力を感じる異性とはどのような特徴を持った人ですか。できるだけ具体的に述べてください。」と教示した。なお、身体的魅力よりも外見的魅力と表現した方が回答者に理解しやすいと考え、質問紙ではすべて身体を外見と表記した。

次いで、刺激人物に対する好意度を測定した。好意度の尺度には、北川 (1998)、池上・喜多 (2007) の投影法による対人距離を用いた。具体的な教示は、「次のページに、あなたともう一人の人物の図が描かれています。その人と会話をする時に最も適当だと思ふ距離に、あなた自身を表す○印を付けてください。」と指示した後、身体的魅力と内面的魅力の条件の組み合わせによって、「その人は、外見的にも内面的にも魅力がある異性です」、「その人は、外見的に魅力はあるが、内面的に魅力がない異性です」、「その人は、外見的に魅力がないが、内面的に魅力がある異性です」、「その人は、外見的にも内面的にも魅力がない異性です」のいずれかを指示した。この教示を条件操作とした。

測定図では、平面図に上から見た実験協力者(あなた)と対象人物(相手)の頭部が向き合うかたちを示し、2人の人物を結ぶ点線上に適切と思ふ位置の記入を求めた。線分の長さ、つまり頭部と頭部の間隔は200mmであった。記入された○印から対象人物までの距離を測定し(単位mm)、これを好意度とした。距離が短いほど好意度が高いことを表す。

結 果

好意度

身体的魅力×内面的魅力×性の8群ごとに好意度の指標である距離の平均値を求め、図1に示した。次いで、3要因分散分析によってその差を比較すると、内面的魅力 ($F(1,112) = 9.41, p < .005$) の主効果と身体的魅力×内面的魅力×性 ($F(1,112) = 6.34, p < .05$) の2次交互作用効果が有意

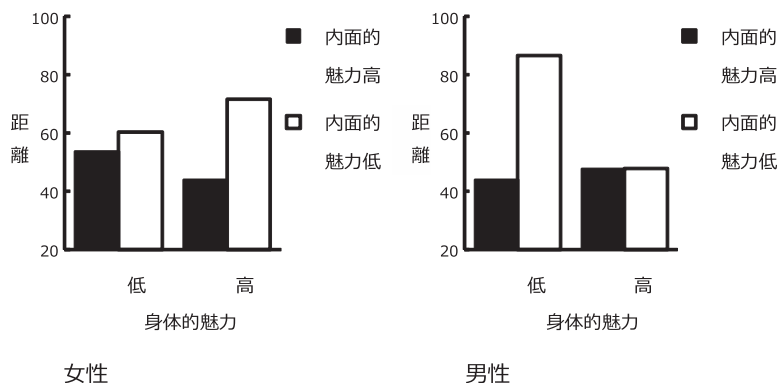


図1 身体的魅力の高低と内面的魅力の高低の組み合わせによる対人距離の性別平均値

注) 距離が小さいほど好意度が高いことを表す。

であった。2次交互作用効果が有意であったので、それぞれの単純主効果を求めると、身体的魅力の差は男性・内面的魅力低条件（ $F(1,112) = 9.36, p < .005$ ）のみが有意であり、身体的魅力が低い群よりも高い群の方が好意度が高かった。また、内面的魅力の差は、女性・身体的魅力高条件（ $F(1,112) = 4.81, p < .05$ ）と男性・身体的魅力低条件（ $F(1,112) = 11.51, p < .001$ ）で有意であり、いずれの条件でも内面的魅力が低い群よりも高い群の方が好意度が高かった。最後に、性差は、身体的魅力低・内面的魅力低条件（ $F(1,112) = 4.26, p < .05$ ）で有意差がみられるとともに、身体的魅力高・内面的魅力低条件（ $F(1,112) = 3.50, p = .07$ ）で有意傾向が確認された。すなわち、身体的魅力低・内面的魅力低条件では、女性よりも男性の方が好意度が低かったのに対し、身体的魅力高・内面的魅力低条件では、逆に、女性よりも男性の方が好意度が高い傾向がみられた。

魅力の自由記述

身体的魅力と内面的魅力に関する自由記述について、単語や表現をもとに記述に含まれる項目数を定めた。なお、「○○のような人」という固有名詞を記した回答（男性の身体的魅力で2件）は分析から除外した。自由記述の段階では魅力の条件操作を行っていない。そこで、魅力の条件を1つにまとめ、性別のみで分け、それぞれの魅力について1人あたりの項目数の平均値を求め、表1に示した。これを、魅力の種類を個体内要因とする性 × 魅力の種類 の2元配置分散分析で比較すると、性（ $F(1,118) = 26.64, p < .001$ ）と魅力の種類（ $F(1,118) = 13.06, p < .001$ ）の主効果が有意であり、女性よりも男性の、また内面的魅力よりも身体的魅力の記述数が多かった。

次いで、KJ法を用いて男女別に、項目の内容をカテゴリーに分類した。なお、該当事例が4以下のものおよびどのカテゴリーにも分類できなかった項目は、「その他」にまとめた。表2に身体的魅力の分析カテゴリーと言及数を示した。「身体の特徴」は、顔を除く部分と体型に関する記述とした。「顔」は、顔と顔を構成する部分の記述とした。ただし、「表情」は動的で、コミュニケー

表1 身体的魅力と内面的魅力の記述数の平均値（SD）

	女性	男性
身体的魅力	2.72 (1.22)	3.88 (1.49)
内面的魅力	2.35 (1.20)	3.43 (1.44)

表2 身体的魅力の記述カテゴリーと言及数（率）

	女性	男性
身体の特徴	72 (44.2%)	77 (33.9%)
顔	26 (16.0%)	41 (18.1%)
身だしなみ	24 (14.7%)	59 (26.0%)
雰囲気	22 (13.5%)	32 (14.1%)
表情	19 (11.7%)	18 (7.9%)

表3 内面的魅力の記述カテゴリーと言及数（率）

	女性	男性	
心配り	43 (30.5%)	84 (40.8%)	心配り
明るさ	26 (18.4%)	49 (23.8%)	明るさ
寛容さ	25 (17.7%)	15 (7.3%)	寛容さ
誠実さ	16 (11.3%)	15 (7.3%)	誠実さ
覇気	12 (8.5%)	15 (7.3%)	自立性
客観性	8 (5.7%)	9 (4.4%)	真面目さ
その他	11 (7.8%)	19 (9.2%)	その他

ションと結びつくので顔と区別した。また、髪はかたちや長さ、色などを比較的自由に変えることができ、それによって与える印象も変化する。回答の内容も髪のある方に言及したものであったことから、「身だしなみ」に含めた。「雰囲気」は外見に関する記述のうち抽象度が高いものとした。身体的魅力は、男女とも同じカテゴリーに分けられた。そこで、言及率の性差を比較すると、有意な差が認められた ($\chi^2(4) = 9.29, p < .05$)。残差分析から、「身体の特徴」は女性の ($p < .05$)、逆に「身だしなみ」は男性の ($p < .01$) 言及率が高かった。同様に、表3に内面的魅力の分析カテゴリーと言及数を示した。4位までのカテゴリーは男女とも同じであったが、5位と6位のカテゴリーは異なった。そこで、試みに5位、6位のカテゴリーを「その他」に統合し、5カテゴリーとして言及率の性差を比較したところ、有意差がみられた ($\chi^2(4) = 9.93, p < .05$)。残差分析の結果、「寛容さ」は女性の方が言及率が高く ($p < .05$)、「心配り」は男性の方が言及率が高い傾向が示された ($p < .10$)。

考 察

本研究は、身体的魅力と内面的魅力の高低が好意度にどのような影響を及ぼすか、またそこに性差が関与するかどうかを検証したものである。

最初に実験仮説の検証を行う。仮説1と2は、身体的魅力と内面的魅力それぞれの高低が好意度に及ぼす影響は男性と女性で異なるという、2次交互作用を前提とする。結果はこれを支持し、好意度の評価には2次交互作用が存在し、男女で明らかに評価の様態が異なっていた。

仮説1は、女性について、身体的魅力が高いほど内面的魅力が好意度に及ぼす影響は大きいことを予測したものである。まず、身体的魅力が高い条件では内面的魅力による好意度に違いがあり、内面的魅力高群の方が低群よりも好意度が高かった。しかし、身体的魅力が低い条件では内面的魅力の高低による差はなく、身体的魅力高条件の2群の中間の値であった。それゆえ、身体的魅力高・内面的魅力低群では、仮説で想定したような反発傾向がみられたと考えることができる。そこで、身体的魅力が低い条件では内面的魅力の違いによる差はみられなかったものの、仮説1は支持されたいえよう。

仮説2は、男性について、身体的魅力と内面的魅力は、それぞれが高いほど好意度が高くなることを予想したものである。身体的魅力が低い条件では内面的魅力による好意度に違いがあり、内面的魅力高群の方が低群よりも好意度が高かった。しかしながら、身体的魅力が高い条件では内面的魅力の高低による差は全く存在しなかった。そこで、身体的魅力低条件でのみ仮説は支持されたということもできる。しかし、仮説2は2種類の魅力の関係についてそれぞれが主効果のかたちで作用するとしたものである。結果は、男性においても2種類の魅力は好意度に対し交互作用効果のかちを示している。したがって、仮説2は支持されなかったというべきであろう。

図1から明らかのように、男性では、女性の身体的魅力が高いときには内面的魅力の違いが影響しないのに対し、女性では、相手の男性の身体的魅力が低いときには内面的魅力の違いはほとんど影響しないという、対称に近い結果が得られた。そこで、内面的魅力の高低に分けて身体的魅力と性の関係を見ると、内面的魅力が高い条件下の4群の間には差は認められず、いずれも概ね好意的に評価されていた。つまり、内面的魅力が高いときには、性も身体的魅力も好意度に影響しなかった。この結果は、身体的魅力の影響は他の属性の評価が低いときに大きいという Pansu & Dubois (2002) の知見と一致する。これに対し、内面的魅力が低い条件では、男性と女性で身体的魅力の影響の方向が逆転していた。すなわち、身体的魅力が高い条件では男性の方が好意度が高かったのに対し、身体的魅力が低い条件では女性の方が好意度が高かった。

ここで、男女それぞれにおける身体的魅力と内面的魅力の関係を要約すると、次のように述べることができるであろう。男性の場合、身体的魅力が高い女性は好まれ、その際、内面的魅力は考慮されない。また、身体的魅力は低い内面的魅力が高い女性も同じように好まれる。しかしながら、両方の魅力とも低い女性は強く拒否される。換言すれば、男性は、女性の身体的魅力と内面的魅力のどちらかが高ければ、他方の低さは問わないといえる。これに対し、女性の場合、身体的魅力が低い男性の内面的魅力の違いはあまり考慮されない。しかしながら、身体的魅力が高い内面的魅力が低い男性は拒否され、逆に両方の魅力が高い男性は最も好まれる。身体的魅力の高低による好意度の違いは男性の方が大きく、かつ女性の身体的魅力の高さは男性に有利に作用することから、女性よりも男性の方が身体的魅力を重視するということができる。しかしながら、男性において身体的魅力高・内面的魅力低群と身体的魅力低・内面的魅力高群の間に差がなかったことは、男性が必ずしも身体的魅力を優先させているわけではないことを意味している。この結果はむしろ、Buss (1989) が主張した男女の配偶者獲得戦略の違いを反映していると理解することができる。男性の場合、身体的魅力が高い女性を好ましいとみなすが、そうした女性は獲得が難しい。そこで、子孫を残す可能性を高めるために、獲得できないよりは、内面的魅力が高ければ身体的魅力は低くともよいとする妥協戦略がとられることになると考えられる。その結果、女性よりも許容範囲、すなわち選択範囲は広がる。一方、女性の場合、子どもを生き育てるコストが男性よりも高いため、自らが求める理想により合致していて、かつ自分に専心してくれそうな男性を選ぶ戦略になる。つまり、身体的魅力と内面的魅力の双方が高い男性を選択の対象とし、そうした男性が現れるまで自

身の体力や経済力を温存するという選抜戦略がとられる。この場合、身体的魅力が高くとも内面的魅力が低い男性は、身体的魅力が低い男性よりも自分に専念する可能性が低いと予想されるので、子どもを生き育てていくという観点から最も忌避されるのである。

本研究は好意度を測定する際、北川（1998）、池上・喜多（2007）に従い、実験協力者に対し「話をするのに適切な距離」を示すように教示した。このことが、測定上接近できる上限値を設定した可能性もある。たとえば、より抽象的に「相手との距離はどの程度が好ましいか」といった教示も考えられるところである。この点は今後の検討課題であろう。また、男性と女性の様態は明らかに異なるものの、全体としていずれかが大きいという、いわゆる主効果に相当する性差はみられなかった。これは、青野（2002）の対人距離の性差に関する知見と一致する。さらに、本研究では、身体的魅力と内面的魅力の内容は、実験協力者自身に委ねる方法を取った。しかし、身体的魅力ステレオタイプを扱った研究の多くは、顔写真を用いて身体的魅力に関する情報を呈示するかたちを取る。それゆえ、そうした操作方法を用いた場合も、同じような結果が得られるかどうかを検討することが必要であろう。

実験協力者がそれぞれの魅力について言及した数には、性と魅力の種類によって差がみられ、女性よりも男性の方が言及数が多かった。しかし、この結果は身体的魅力が好意度に及ぼす影響は女性よりも男性の方が大きいことを示すものではない。もし内面的魅力の記述数に性差がなく、身体的魅力で男性の記述数が多いという交互作用効果が得られたならば、その証左となる。しかし、主効果だけが得られた以上、魅力の種類が何であれ男性の方が多く言及するというだけにとどまる。内面的魅力よりも身体的魅力の記述数が多かったことは、身体的魅力の方が具体的に述べやすいためであろう。また、内容面で、身体的魅力の方が言及数が多いにもかかわらず、男女とも同一の少数のカテゴリーに集約されたことも、同様の理由によると考えることができる。魅力の内容にも性差がみられ、身体的魅力では、「身体の特徴」は女性の方が、また「身だしなみ」は男性の方が言及率が高かった。女性が述べる男性の身体的魅力の4割以上が体型を含む身体の特徴であったことは、女性は男性の体型に一定の好みをもつという Singh（1995）の知見と一致する。他方、内面的魅力では、「心配り」は男性の方が、また「寛容さ」は女性の方が言及率が高かった。男性が「心配り」を高く評価することは、下田・井上（2013）と一致する。しかし、内容が多様であるにもかかわらず、言及順位4位まで男女で同じカテゴリーであったことは、明るさなどの性格特性は男女とも同じように重視するという Buss（1989）の知見に沿うものといえる。

従来、身体的魅力の高さは社会的に望ましいさまざまな特性と結びつくことが指摘されてきた。しかし、異性の身体的魅力が好意度に及ぼす影響は内面的魅力との関係によって変化するとともに、その様態は男性と女性で異なるのである。

謝辞

本研究の実施に際して、早稲田大学教育学部五十嵐亜美氏の協力を得た。記して謝意を表する。

[引用文献]

- 青野篤子 (2002). 対人距離の性差に関する研究の展望—従属仮説の観点から—実験社会心理学研究, 42, 201-218.
- Asch, S. E. (1946). Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Buss, D. M. (1989). Conflict between the sexes: Strategic interference and the evocation of anger and upset. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 735-747.
- Cash, T. F. & Janda, L. H. (1984). The eye of the beholder. *Psychology Today*, 18(12), 46-52.
- Castellow, W. A., Wuensch, K. L., & Moore, C. H. (1990). Effects of physical attractiveness of the plaintiff and defendant in sexual harassment judgments. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 547-562.
- Dermer, M. & Thiel, D. L. (1975). When beauty may fail. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 1168-1176.
- Dion, K. K., Berscheid, E., & Walster, E. (1972). What is beautiful is good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 285-290.
- Downs, A. C. & Lyons, P. M. (1991). Natural observations of the links between attractiveness and initial legal judgments. *Personality Social Psychological Bulletin*, 17, 541-547.
- Eagly, A. H., Ashmore, R. D., Makhijani, M. G., & Longo, L. C. (1991). What is beautiful is good, but ...: A meta-analytic review of research on the physical attractiveness stereotype. *Psychological Bulletin*, 110, 109-128.
- Feingold, A. (1991). Sex differences in the effects of similarity and physical attractiveness on opposite-sex attraction. *Basic and Applied Social Psychology*, 12, 357-367.
- Feingold, A. (1992). Good-looking people are not what we think. *Psychological Bulletin*, 111, 304-341.
- Fletcher, G. J. O., Tither, J. M., O'Loughlin, C., Friesen, M., & Overall, N. (2004). Warm and homely or cold and beautiful? Sex differences in trading off traits in mate selection. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 659-672.
- Gilmore, D. C., Beehr, T. A., Love, K. G. (1986). Effects of applicant sex, applicant physical attractiveness, type of rater, and type of job on interview decisions. *Journal of Occupational Psychology*, 59, 103-109.
- Gross, A. E. & Crofton, C. (1977). What is good is beautiful. *Sociometry*, 40, 85-90.
- Hamermesh, D. S. & Biddle, J. E. (1994). Beauty and the Labor Market. *The American Economic Review*, 84, 1174-1194.
- 池上貴美子・喜多由香理 (2007). 対人距離に関する性・年齢・魅力・親密度の要因の検討 金沢大学教育学部紀要教育科学編, 56, 1-12.
- Jacobson, M. B. (1981). Effects of victim's and defendant's physical attractiveness on subjects' judgments in a rape case. *Sex Roles*, 7, 247-255.
- Johnson, D. J. & Rusbult, C. E. (1989). Resisting temptation: Devaluation of alternative partners as a means of maintaining commitment in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 967-980.
- 北川歳昭 (1998). 教室の座席行動と個人空間—教師への距離の調整としての学生の着席位置— 実験社会心理学研究, 38, 125-135.
- Langlois, J. H., Kalakanis, L., Rubenstein, A. J., Larsen, A., Hallam, M., & Smoot, M. (2000). Maxims or myths of beauty? A meta-analytic and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 126, 390-423.
- Lerner, R. M. & Lerner, J. V. (1977). Effects of age, sex, and physical attractiveness on child-peer relations, academic performance, and elementary school adjustment. *Developmental Psychology*, 13, 585-590.
- Lewis, K. E. & Bierly, M. (1990). Toward a profile of the female voter: Sex differences in perceived physical attractiveness and competence of political candidates. *Sex Roles*, 22, 1-12.
- Loh, E. S. (1993). The economic effects of physical appearance. *Social Science Quarterly*, 74, 420-438.
- Marlowe, C. M., Schneider, S. L., & Nelson, C. E. (1996). Gender and attractiveness biases in hiring decisions: Are more experienced managers less biased? *Journal of Applied Psychology*, 81, 11-21.
- Pansu, P. & Dubois, M. (2002). The effects of face attractiveness on pre-selective recruitment. *Swiss Journal of Psychology*, 61, 15-20.
- Ritts, V., Patterson, M. L., & Tubbs, M. E. (1992). Expectations, impressions, and judgments of physically attractive students: A review. *Review of Educational Research*, 62, 413-426.
- 下田 愛・井上果子 (2013). 青年期男性が抱く「理想の女性イメージ」—恋愛関係と結婚関係の比較— 日本心理学会第77回大会発表論文集, 79.

- Sigall, H. & Ostrove, N. (1975). Beautiful but dangerous: Effects of offender attractiveness and nature of the crime on juridic judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 410-414.
- Singh, D. (1995). Female judgment of male attractiveness and desirability for relationships: Role of waist-to-hip ratio and financial status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1089-1101.
- Sprecher, S., Sullivan, Q., & Hatfield, E. (1994). Mate selection preferences: Gender differences examined in a national sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 1074-1080.
- Thornton, B. & Ryckman, R. M. (1983). The influence of a rape victim's physical attractiveness on observers' attributions of responsibility. *Human Relations*, 36, 549-561.
- Walster, E., Aronson, E., Abrahams, D., & Rottman, L. (1966). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.
- Wapnick, J., Darrow, A. A., Kovacs, J., & Dalrymple, L. (1997). Effects of physical attractiveness on evaluation of vocal performance. *Journal of Research in Music Education*, 45, 470-479.
- West, S. G. & Brown, T. J. (1975). Physical attractiveness, the severity of the emergency and helping: A field experiment and interpersonal simulation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 531-538.